

「もう・まだ」についての一考察  
(誤用研究中間報告)

三 枝 令 子

1. はじめに

副詞のうち、話し手の主観を表わす文末表現にかかるものは一般に陳述副詞と呼ばれている。代表的なものとして「多分」、「おそらく」、「決して」等が挙げられる。本稿で扱う「もう・まだ」は、典型的な陳述副詞ではないが、しかし明らかに話し手のムードに関係している。「もう3時だ。」、「まだ3時だ。」という発話には、発話時点が3時であるという認識に加えて、「もう・まだ」によってもたらされる客観的な時間には関係しないある心理的效果がある。このことが留学生にその使い方を誤らせる原因にもなっている。たとえば次のような問題に学生の誤用が目立った。

1) そんな昔のことは、もう\_\_\_\_\_。

- a. はっきり忘れてしまいました。
- b. 言わないことにしましょう。

2) A: 荷物がたくさんあるんですが。

- B:
- a. この箱はまだ入りませんよ。
  - b. この箱はまだ入りますよ。

上の1)2)において、a を選択する学生がかなりいる。1)の場合には「はっきり」という副詞の意味がとれていないということが大きい。筑波大学留学生教育センターのプレースメント・テストでは、b より a を選ぶ学生の方が多かった。日本語教育のごく初級では「もう」は肯定文、「まだ」は否定文に限定して教えることもあるが、それだけの知識では先の問題は答えられない。学研の「JAPANESE FOR TODAY」(1973)には「もう・まだ」について次のような日本語と英語の対訳表がのっている<sup>1)</sup>。

	+ Aff, Predicate	+ Neg Predicate
mō...	'already'	'(no) more ; (no) longer...'
mada...	'still'	'(not) yet'

この対訳表によって「もう・まだ」のかなりの用法が説明しうるが、しかしこの英訳が必ずしもいつもあてはまるわけではない。たとえば次のような反例を挙げることができる。

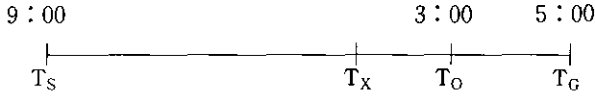
Has the bus arrived yet?

(バスはもう着きましたか。)

また英語がわからない学生もいることを考え合わせると、「もう・まだ」について日本語で明確にその意味・用法を説明できるようにしておく必要があるといえる。以下はその試みの中間報告ともいべきものである。なお本稿では、「もう早いものなんのって。」や「もう変なことばかり言うんだから。」等に見られる感嘆詞的な用法は取り上げなかった<sup>2)</sup>。

## 2. 「もう・まだ」の意味

「もう3時だ。」「まだ3時だ。」というような表現を用いる時、人は必ずどこかに拠り所となる点を持ち、たとえば9時に仕事が始まった、あるいは5時には仕事が終わるといった基点、その点と発話時点とを結ぶ時間軸の延長上で時間の流れ方を感じていると考えられる。そこで仮に仕事の開始時点を  $T_S$  とし、終了時点を  $T_G$ 、発話時点を  $T_O$  とすると、それぞれの点は次のような位置にならぶ。



仕事の開始時点を基準にした場合、「もう3時だ。」という発話は、仕事開始から予想以上にこんなに時間がたったという心理状態を反映している。当初の予想は、3時より前であるので、それを  $T_X$  とすると、定式的には、以上のことは次のように表わせる。

$$|T_S - T_O| > |T_S - T_X| \dots\dots\dots ①$$

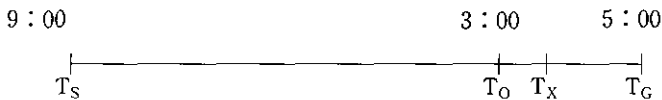
①式は  $T_S \cdot T_X$  間の距離は、常に  $T_S \cdot T_O$  間の距離より短いことを示している。

次に仕事の終了時点を基準にした場合、「もう3時だ。」という発話は、仕事終了時までの時間が予想より短いという心理状態を反映しているので、定式的には、次のように表わせる。

$$|T_G - T_O| > |T_G - T_X| \dots\dots\dots ②$$

①②式に共通するところは、 $T_O$  が  $T_X$  よりあとにあるという点である。すなわち「もう3時だ。」のように「もう」が時の点を修飾する場合、発話時点は基準がどこにあらうと常に予想値点よりあとにあるといえる。この場合は話し手が時間の経過を短かく感じているということがいえる。

次に「まだ3時だ。」という発話を考える。仕事の開始時点を基準にすると、この発話は仕事開始から予想以上に時間のたつのが遅いという心理状態を反映している。当初の予想は、3時よりあとにあるので、予想値点  $T_X$  は次のような位置にあることになる。



定式的には次のように表わせる。

$$|T_S - T_O| < |T_S - T_X| \dots\dots\dots ③$$

$T_S \cdot T_O$  間の距離は常に  $T_S \cdot T_X$  間の距離より短い。また、仕事の終了時点を基準にした場合は、仕事終了時までの時間が予想より長いという心理状態を反映しているので、定式的には次のように表わせる。

$$|T_G - T_O| < |T_G - T_X| \dots\dots\dots ④$$

③④式に共通するところは、 $T_O$  が  $T_X$  より前にあるという点である。すなわち「まだ3時だ。」のように「まだ」が時の点を修飾する場合、基準がどこにあらうと発話時点は常に予想値点より前に

あるといえる。この場合は、話し手が時間の経過を長く感じているということがいえる。

以上は時の点を表わす発話における「もう・まだ」の用法であった。時や分量の幅を表わす発話においても同じ規則が成り立つであろうか。たとえば10人が定員のグループを考えてみる。人の集まりが0人であった時点を基準にした場合、「もう8人だ。」という発話は、予想以上に早く人が集まっているという心理状態を示している。ここでは点という離散型の数値ではなく幅の変化である連続数を考えるので記号をPとして、予想値点を $P_X$ とすると、各点は次のように並らぶ。



定式的には次のように表わせる。

$$|P_S - P_O| > |P_S - P_X| \dots\dots\dots \textcircled{5}$$

また10人の定員を基準にした場合、「もう8人だ。」という発話は、定員がいっぱいになるのは予想以上に早そうだという心理状態を示しており、定式的には次のように表わせる。

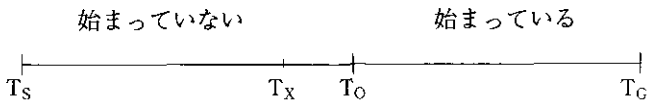
$$|P_G - P_O| < |P_G - P_X| \dots\dots\dots \textcircled{6}$$

⑤⑥式に共通している点は、 $P_O$ が $P_X$ よりあとにあるということである。ここでは時の幅の例は省略するが同様のことがいえるので、「もう」が時・分量の幅を修飾する場合も、先の時の点の場合と同じく、基準がどこにあっても発話時点は予想値点より常にあとにあるといえる。この場合話し手は時間の経過、もしくはある状態の成立を早く感じているということがいえる。

時・分量の幅における「まだ」の意味・用法も時の点の場合と全く同様である。すなわち基準がどこにあっても発話時点は予想値点より常に前にあり、この場合話し手は時間の経過、もしくはある状態の成立を遅く感じているということがいえる。

### 3. 「もう・まだ」成立の前提条件

まず「もう始まった。」「まだ電気がついている。」といった瞬間動詞による表現を考える。「もう始まった。」という表現は、ある事柄の開始が予想以上に早いという心理状態を示している。



時間の流れの上では、ある事柄が始まっていない状態から始まっている状態へ移行しており、その流れの上で発話時点 $T_O$ は、先に2節で見たように予想値点 $T_X$ よりあとにある。一方「まだ電気がついていない。」という発話は、電気がつくことが予想より遅いという心理状態を示しており、発話時点 $T_O$ は予想値点 $T_X$ より前にある。



#### 4. 否定文と疑問文

上で見たように「もう・まだ」が対立する概念を含んだ状態の進行を前提としていると考えると、次のような発話の不自然さは説明が可能である。

まだ子供だ。	もう大人だ。
*まだ子供じゃない。	*もう大人じゃない。

すなわち「まだ子供じゃない。」という発話には子供以前の状態が必要であり、また「もう大人じゃない。」という発話には、大人以後の状態が必要であるが、そのようなものは存在しない。これが子供や大人ではなく、それ以前の状態もそれ以後の状態も設定可能な内容であればこのような不自然さは生まれない。

まだ社長だ。	もう社長だ。
まだ社長じゃない。	もう社長じゃない。

「もう3時じゃない。」という発話の不自然さも基本的に同じだと考えられる。すなわち「もう2月じゃない。」という発話は予想値点の2月に対して既に3月であるという対立概念が頭に浮かびやすいが、「もう3時じゃない。」という発話の対立概念はあいまいである。

一般に発話の最初の疑問文には「もう・まだ」は現われにくい。「もうごはんを食べますか。」という発話は、食事の時間が話し手と聞き手との間で了解されている場合に成り立つものであろう。事実の確認としての「もう3時ですか。」という発話は可能だが、単に情報を求めている時には「もう3時ですか。」「まだ3時ですか。」という疑問文は不自然である。このことも「もう・まだ」がモーダルな要素を備えていることの表れといえよう。

#### 5. 「もう」の特殊用法

「もう10分ある。や「もうすぐ」のように「もう」には数詞や時の副詞を修飾して追加を表わす用法がある。この場合には「もう」と次の語が一語となってアクセントをつける。実際の用例にはこれが非常に多い。

#### 6. おわりに

以上「もう・まだ」の意味・用法を見てきた。なお多くの実例について一層の検討が必要である。また中国語や韓国語等との比較によって学生の誤用の原因となるような問題があるか否かを確認する必要がある。

先に上の4. で「もう3時じゃない。」という発話の不自然さを対立概念の有無で説明したが、一方で「まだ3時じゃない。」という発話は自然である。「もう・まだ」が時の点や分量の幅を修飾する場合には、一時的な動作・状態を修飾する場合はまた異なった用法もあるように思われるが、これも今後の課題として考えていきたい。

## 注

1) 『JAPANESE FOR TODAY』1973. 学研 P 62

2) 感嘆詞的な用法については、青木三郎 1986

「《déjà》と「もう」－副詞の日仏対照語研究」文藝言語研究 言語篇11 筑波大学に言及がある。

(特別推進研究(1)課題番号600600015 日本語の普遍性と個別性に関する理論的及び実証的研究 代表者 井上 和子)